

第2章 「プラジャの存在イメージ」と「主体としてのプラジャのイメージ」

ここであらためて各象徴世界の「プラジャの存在イメージ」を見ていくと、それらが相互に響き合い、もつれ合っているように見える。各象徴世界の「プラジャの存在イメージ」がその類似性によって、お互いを惹きつけ合うようになる。そのとき、各象徴世界、各位相は地滑りするように接続される。そして、各象徴世界内の「プラジャの存在イメージ」に加えて、歴史的な「主体としてのプラジャのイメージ」が浮かび上がる。

例えば、サールの世界やドウキの世界で、外部の存在から一方的に奪われるのを嫌う「プラジャの存在イメージ」は、チンランの世界の平等主義的な「プラジャの存在イメージ」と重なり合うように見える。お互いの眼差しの力を信じ、きちんと均等に分配することが規範となる世界の「プラジャの存在イメージ」は、サールによる一方的搾取と衝突する。その接続をおこなえば、肉や物品の分配などで平等主義的に生きてきたからこそ、開発の時代にも権力の一方的搾取に平等を訴えて抵抗する「主体としてのプラジャのイメージ」が立ち上がる。

また、サールの世界で広がる平等の欠落感は、チンランの世界の平等主義的な「プラジャの存在イメージ」を喚起する、とも読み取ることができる。そこから、さらにサールたちに対する他者としての違和感が、日常の平等主義的な分配や規範を増強する、というのもあり得ない話ではない。そうなれば、開発の時代の不平等な状況のなかで苦しみ、平等主義的な価値観を持ったために、肉の分配など日常的な平等感覚を重視する「主体としてのプラジャのイメージ」が浮かんでくる。

また、ダブルバインドから踏み出したところで見いだされた現実主義に生きる「プラジャの存在イメージ」は、「愛」の根本にある共有された日常を重要視する「プラジャの存在イメージ」に繋がると見ることもできる。例えば、現実的な行為の相互的な積み重ねを重んじる、そのような生活感覚を持っていたがゆえに、開発が示す進歩の物語やそれに対抗して偶像化されるプラジャの姿のどちらも受け入れずに現実的に生きていく、そのような「主体としてのプラジャのイメージ」が抽出できる。また逆に、開発などによるダブルバインド的な状況が進めば進むほど、平等主義的感覚や現実主義が必要とされるようになり、その結果としてケアの論理、相互扶助的な「愛」を重要視するようになった「主体としてのプラジャのイメージ」も想像することができる。

チョールの世界からサールの世界、ドウキの世界まで、それら内部の「プラジャの存在イメージ」は、「排除」というメッセージと「包摂」というメッセージとのダブルバンド的な状況を共有しているように見え、それによって相互に接続可能である。その場合、それら世界（時代）が変わっても、ダブルバインド状況を生き抜いていこうとする「主体としてのプラジャのイメージ」が立ち上がる。

また、そうした「排除」や「包摂」をおこなう権力的な外部の眼差しは、サールの世界では、人びと自身の眼差しと重なっていた。そうすると、「シャア／人間／ジャア」や「ブタ／人間／チンラン」というふたつの図式の、ジャアやチンラン、そして

国家的、ヒンドゥー的な権威としてのミジャールや「バフン」、そしてサールといった権力的な外部の眼差しを受け継いできた「主体としてのプラジャのイメージ」が浮かび上がってもおかしくない。

これらの権力的な眼差しを、外部から一方的に奪うもの、として捉えたとき、それらは「愛」に生きる民族、現実主義に生きる民族、そうした「主体としてのプラジャのイメージ」と衝突する。どちらか一方しか成り立たない闘争が、この「主体としての自己のイメージ」の潜在的可能性を巡る世界で始まる。

この点に注意しながら、もう一度上に見た接続を見直すと、上手くいかずに宙づりになってしまう状況も出てくる。例えば、チョールの世界やサール、ドゥキの世界で権力的な外部と対峙してきた「プラジャの存在イメージ」と、チンランの世界の平等主義を担う「プラジャの存在イメージ」を接続するときである。人びとは、外部的な権力に「愛」や「馴染み」からなる平等主義的原理で対峙している主体として捉えることができる。だが、平等主義的原理の主体であっても土地相続において女性を「排除」しているという点では、上のような外部的な権力と接続できてしまう。このように、人びとの平等が「排除」を含んだ権利なのか、「愛」や「馴染み」によるものなのか、疑問が生じたまま接続することができなくなる。

だが、こうした接続は、本章でまとめて見た各世界の「プラジャの存在イメージ」以外にも、各世界内部の微細な位相における存在イメージを取り上げて続けていくことも可能である。

一例をあげれば、開発などによるダブルバインド状況から抜け出すために「背後にある意味を絶えず探し求める」ような「プラジャの存在イメージ」は、様々な形象に差異を差し込みつつ異界へと達していたチンランの世界（トンコロンの場面）における「プラジャの存在イメージ」と重なり合っているように見える。そこから、そうした異界を見る眼差しが今日的な新たな世界を切り開く眼差しに影響したと見ることもできる。そうなれば、異界を知るからこそ、今日のダブルバインド状況で新たな創造をしようとする「主体としてのプラジャのイメージ」が見えてくる。逆に、そのようなダブルバインド的な状況により、異界を含めたコスモロジカルな想像が促進されると考えられなくはない。そうすると開発の混乱をもたらす状況により、異界に差異を差し込む術を獲得し、新たな異界を生み出していく「主体としてのプラジャのイメージ」が立ち上がることになる。

同様にチンランの世界のトンコロンの場面で起点と終点が結びつけられた形象を供物として捧げる人びとの姿があったが、その供物の形象はドゥキの世界で見たダブルバインド状況のイメージと重なっているように見える。ここから、そのような供物の効果を理解し、ダブルバインド状況でもそこから抜け出す術を見出していこうとする「主体としてのプラジャのイメージ」や、逆に、矛盾したメッセージを投げかけられたときに身動きするのが難しいことを自らの経験から知り、そのような形象の供物の力を祖先霊やラン（悪霊）の逆行を止めるのに利用する「主体としてのプラジャのイメージ」を想像することもできる。

このような微細な位相、存在イメージ、あるいは眼差しをさらに接続し、多様な主体イメージを抽出していくことが可能だろう。だが、ドゥキの背後にある世界を探ろうとするヒラ氏のイメージを他の象徴世界におけるものと結びつけようとしたとき

には、やはり、接続が上手くいかない別の事態が起きる。ヒラ氏のドウキは、つぎのような接続については理解しやすい。ドウキへの眼差しと伯父のスダム氏のマーパンデとして異界を見つめ世界を切り開き想像していく眼との接続。また、ドウキへの眼差しと、ヒラ氏が外の世界に出るのを止めた母親のダマンチさんの女性として「排除」されたものへの共感との接続である。また、そのようなドウキとの関係をチンランの世界の平等感覚と結びつけることも可能である。ヒラ氏はドウキの眼差しの力を知っていたのかもしれないし、ドウキの持つ何かがかきかけで「愛」の平等感覚が呼び覚まされたのかもしれない。

こうした接続は相互に絡み合いながら、ドウキを拾い上げ続けるヒラ氏のイメージの輪郭をより明瞭なものにする。そこでさらに、シャアやクスンダという「排除」され続ける存在を彼はどのように捉えているのか、探してみる。

ヒラ氏がシャアのことをどう言っていたのか筆者は知らない。だが、クスンダのことをどう言っていたのか思い出そうとすると、つぎのようなことが起こる。

あれもドウキだよな。

語りの情景とともに、そのようなヒラ氏の声が鮮明に聞こえてくる。だが、フィールドノートをいくら捜しても、彼のその言葉が見つからない。そうした会話の記録自体がない。一体、その記録はどこに行ってしまったのだろうか。筆者の単なる思い違いなのか。

しかし、そう思えば思うほど、記憶の情景は鮮明になり、彼の声は筆者の頭のなかで一層はっきりと響く。ふたたび彼のもとに赴き、確認すればよいのではないかと思うが、彼がその発言を仮に否定したとしても、筆者はそれを受け入れることができないかもしれない。それほど、はっきりした記憶、彼の声なのである。

それなら、いつそ彼はクスンダをドウキと言ったのだと書いてしまおうか、と考える。その瞬間、筆者の脳裏に彼の顔が浮かび、筆者をじっと見つめるのを感じる。筆者には彼の眼が見えるわけではない。だが、彼の顔にあるはずの眼がじっと見つめているように感じるのである。こうして、彼はクスンダをドウキと言ったのか、それとも言わなかったのか、そして筆者の記憶はどれほど確かなものなのか、という疑問が続く。

このように分析を重ねた先では、声と眼差しとのあいだのズレによって身動きが取れなくなる。ここから抜け出すには、もう一度現実の彼に会い、それが本当にあったのか訊いてみるしかない¹。訊けば、答えがわかるかもしれない。あるいは、かえってわからなくなるかもしれない。それでも分析を続けるためには訊いてみるしかない。

各象徴世界の微細な位相や存在イメージを接続していく操作を進めると、接続主体が接続対象を創作してしまう可能性が出てくる。そして、その接続対象が現実のものかどうか確認できない場合、このような「自／他」と「現実／想像」が不分明な事態が生じる。そこから脱し、接続を続けていくためには真実が得られるかどうかはさて

おき、現実に立ち返り、抽出したイメージが現実に沿ったものかどうかの判断が迫られるのである。

結局、そのような歴史的な手続きを加えつつ、新たな資料を蒐集してイメージの抽出可能性を広げ、そこからまた新たな現実に向かい続ける、そのような往復運動として、本稿の試みは続けられなくてはならない。さもないと、本稿は序論で述べたように、単なる「プラジャの心性」一般論、「プラジャ」のナショナリズム的言説とそれほどかわらないものになってしまうだろう。

本稿で筆者がおこなった各象徴世界の接続は、それによって内的空間を構築するが、接続を過剰なまでに続けるなかで、その外縁（内的空間の構成要素への懐疑）に突き当たり、外部を求め始める。その求めに応じることで、「プラジャ」を名乗る人びとの「自己表象」の資源は、本稿を超えて拡張し始めるはずである。

注

¹ 現在、M村はマオイストにより完全に掌握されていると伝え聞く。そのような状況下で彼はどのように暮らし、マオイストという異人をどのように見つめているのだろうか。M村の人から手紙は来ているが、ヒラ氏自身からは消息を受け取っていない。